

能力における 祭りと日常生活の関連性

森の祭りをういた中村孚美の再検討

The Connection between Festival and Everyday:
Rethinking of NAKAMURA Fumi's Studies through Mori Festival

谷部真吾

はじめに

① 森の祭りの概要

② 商人町の祭り

③ 旧社長の解釈

④ 祭りと日常生活との関連性

むすびにかえて

【論文要旨】

現在、「祭礼研究」あるいは「都市祭礼（祝祭）研究」と呼ばれている分野を開拓した研究者に、中村孚美がいる。彼女は、精力的に数多くのモノグラフを記してきたが、これらの研究における特徴として、祭りと日常生活という両場面において、必要とされる能力に関連性があるとする語り口を挙げることができる。この刺激的な視点は、その後のこの分野における研究で、積極的に用いられることはなかったように思われる。そこで、本稿では、中村と同じ視点に立って、静岡県周智郡森町で行なわれる森の祭りを分析してみた。

その結果、一見すると、両者の間で必要とされる能力に関連性があるように見うけられるが、祭りの担い手からすると、これらは結びつくものではないことが分かった。というのも、彼らは、祭りと日常生活とは全く別物として認識しているため、これらを結びつけるという発想そのものが欠如していたからだ。

この認識の存在は、とりもなおさず、中村が研究対象としてきた地域との差異を意味する。従来のように、祭りに参加する人々の結合原理から分類すると、彼女が研究対象とした地域の祭りも、本稿で事例として取り上げた森の祭りも、ともに「伝統型祝祭」という同じカテゴリーに属すると考えられる。しかし、このように、祭りと日常生活とを担い手たちがどのように認識しているかという指標を加えると、同一のカテゴリーの中にも差異が存在していることを理解できよう。とすれば、次に問題となるのは、このような違いを我々はどのように捉えるべきかである。この点についても、最後に、補足的ではあるが、その方向性を示してみた。

キーワード：祭礼研究、中村孚美、祭りと日常生活、森の祭り、認識

はじめに

1971年、『日本民俗学』に、「町と祭り——秋田県角館町の飾山囃子の場合——」と題された中村孚美による論文が掲載された[中村 1993 (1971)]。この論文は、学史上、「祭礼研究」あるいは「都市祭礼（祝祭）研究」と現在呼ばれている分野を開拓した研究として位置づけることができる。その後、彼女は、埼玉県秩父市の秩父祭り[同 1972 a]、同県川越市の川越祭り[同 1972 b]、福岡県博多市の博多祇園山笠[同 1986]を対象としたモノグラフを発表した。これら一連の研究は、民俗学だけでなく、人類学にも影響を及ぼした。例えば、米山俊直は、「祇園祭を通して、京都を学ぶ、ということを考えていた私には、この（中村による）“秩父モデル”の存在がひとつのきっかけになっていたのであった」と述べ[米山 1974:13（ ）は筆者]、日本における都市人類学を本格的に開始していった。

中村孚美が、これらの研究を通して明らかにしようとしていたことは、ほぼ一貫している。彼女は、それぞれの祭りには、それを担う地域社会の気風が反映されていることを主張しつづけた。例えば、角館の飾山囃子の研究では、「しかもそこには、『交渉』におけるかけひきや粘り強さ——それは商家の主人としても大切な資質であろう——ひとつみても明らかのように、この町の気風がいかに反映されているのである」としているし[中村 1993:234]、また博多の博多祇園山笠の研究における結論部分では、「そこには博多の人たちの生活の美意識、あるいは行動の美学といったものが、行事の隅々に至るまで反映していることは確かである」と述べている[同 1986:184]。

これら中村の研究で特徴的なのは、ある1つの語り口であると思われる。それは、先に挙げた角館の飾山囃子に関する引用文中にも見ることができる。そこでは、商人としての資質と祭りの役職の中で必要とされる能力との間に関連性があると指摘しているものであり、そしてそれを論拠として、町の気風が祭りに反映されていると結んでいる。同様の語り口は、博多祇園山笠の研究でも見出せ、「取締り、ことに当番町の取締りになると、一年のエネルギーの大半を祭りにつかうのだが、年寄りがそれを許すのは、それによって店の者たちの統率の仕方を覚えるからだ」という、「ある現役取締り」の語りを取り上げ[同:182]、ここでも祭りの中で身につけた能力が日常生活で役立てられることを示し、これが先に挙げた結論を導くための1つの論拠となっている。以上のような中村の視点は、祭りと日常生活という両場面において、必要とされる能力に関連性があるとする点で、非常に独特である。しかしながら、彼女によって提示された、この刺激的な視点は、この分野におけるその後の研究の中で、積極的に用いられることはあまりなかったように思われる。そこで本稿では、中村と同じ視点に立って祭りを分析し、祭りで必要とされる能力が、どの程度、日常生活でも必要とされるのかについて考えていきたい。そうした上で、さらに、この分野における1つの研究方向を提示したい。その意味で、本稿は、中村の研究を再検討することで立ち上がってくる問題を明らかにするための一試論である。この作業を進めるにあたり、事例として、静岡県周智郡森町で毎年11月に行なわれる通称「森の祭り」を用いることとする。

①……………森の祭りの概要

森町森地区の概要

森の祭りは、毎年11月1日から3日の日程で行なわれる、三島神社の祭りである。これに参加する町内は、現在14あるが、これら全てが三島神社の氏子というわけではない（表1）。城下・天宮・向天方・戸綿の各町内は、それぞれ、谷本神社・天宮神社・天方神社・稲荷神社⁽¹⁾という別個の氏神をもっている。氏神の異なるこれらの地区が、森の祭りに参加するようになった年代は一様ではなく、また何故、三島神社の祭りに参加するようになったのかは不明である。これに対して、新町・明治町・仲横町・本町・川原町・下宿・大門・西幸町・南町・栄町は、三島神社の氏子地区となっている。本稿では、これら、三島神社氏子地区10町内を「森地区」として表記し、歴史的に古くから森の祭りに関わってきたと推測される当地区を中心に分析を進めていくことにする。

森地区は、近世期、旗本土屋氏の所領であり、「森町村」と呼ばれていた。南北に秋葉街道が貫くこの村は、始めは宿場町として、次いで古着を扱う商業の町として栄えたという。1830年（文政13）に編まれた家数・人別書上げをみると、当時の森町村の様子を窺うことができる（表2）。それによると、家数は合計358軒、そのうち百姓141軒、商人149軒、旅籠屋24軒、諸職人40軒、医師2軒、座頭2軒であった。また、人別は、合計1,395人、そのうち男が665人であり、さらに男のうちで15歳以下と60歳以上の者、病身・足弱な者、および村役人など267人を引いた残り398人の内訳を見ると、商人153人、旅籠屋34人、諸職人57人、医師と座頭5人、百姓149人となっている。以上から明らかなように、森町村では、家数・人別いずれにおいても、商人・旅籠屋

表1 参加町内一覧表

町名	社名	氏神	備考
新町	北街社	三島神社	
明治町	明開社	三島神社	1885年(明治18)に開かれた町 参加年不明
仲横町	比雲社	三島神社	
本町	水哉社	三島神社	
川原町	沿海社	三島神社	
下宿	桑水社	三島神社	
城下	谷本社	谷本神社	参加年不明
天宮	凱生社	天宮神社	1890年(明治23)より参加と推定
向天方	慶雲社	天方神社	1922年(大正11)より参加
戸綿	陸栄社	稲荷神社	1926年(昭和1)より参加
大門	鳳雲社	三島神社	1980年(昭和55)より参加 水哉社・比雲社より独立
西幸町	龍西社	三島神社	1972年(昭和47)開発の新興住宅地 1980年(昭和55)より参加
南町	湧水社	三島神社	1985年(昭和60)より参加 桑水社より独立
栄町	藤雲社	三島神社	1987年(昭和62)より参加 桑水社より独立

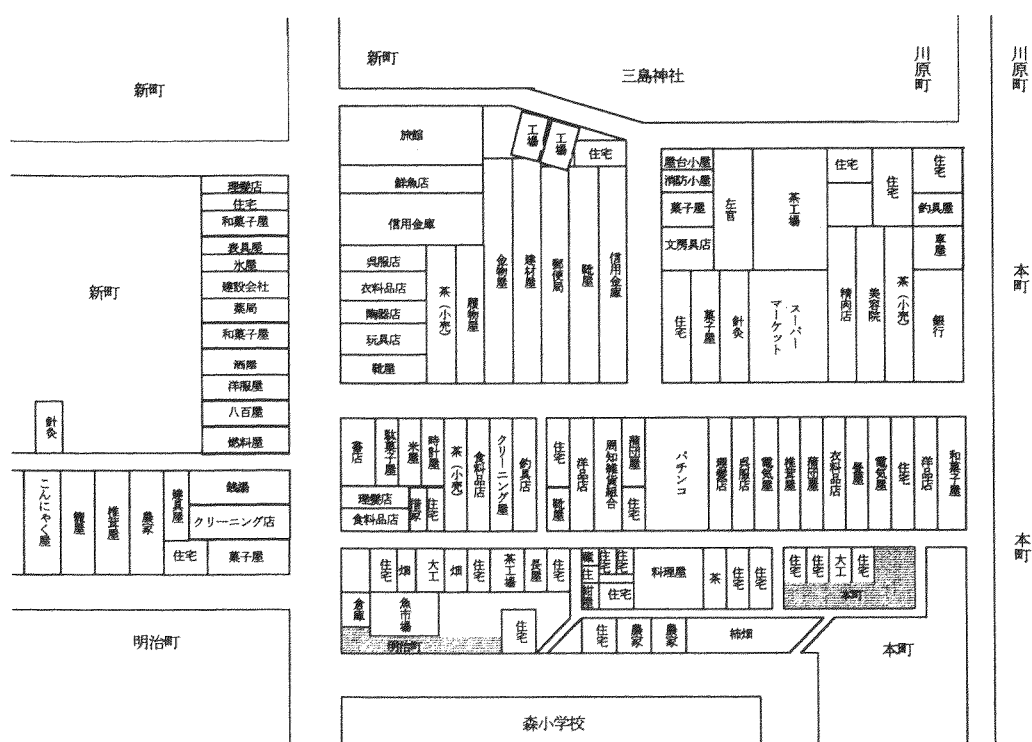
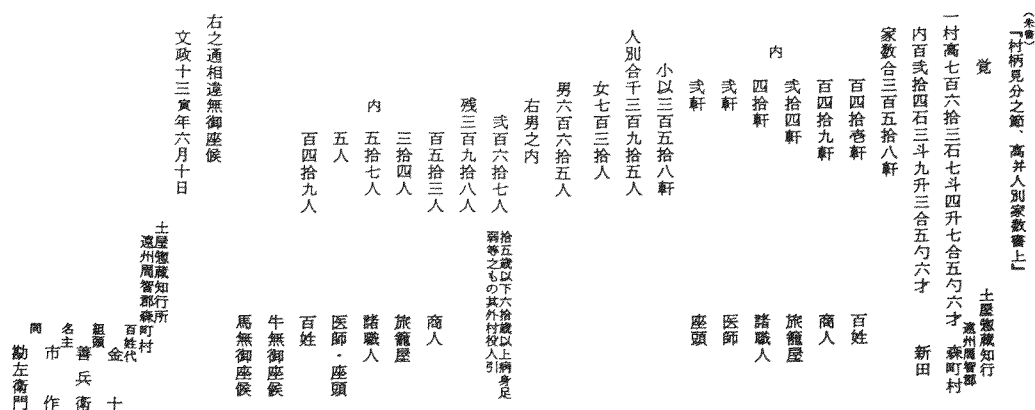


図1 昭和30年代の仲横町（青木幹夫氏からの聞き書きをもとに筆者作成）

・諸職人がほぼ6割に達しており、百姓をかなり上回っていたことが分かる[森町史編さん委員会1996:571]。しかも、とりわけ商人と旅籠屋の占める割合が高いことから、当時の森地区を商人の町として位置づけることができよう。

この後、森地区の産業構造を示す資料は、残念ながら見当たらない。そこで、時代的に大きな開きがあることを自覚しつつ、補足的に昭和 30 年代における仲横町の街並みを聞き書きによって作成してみた（図 1）。それによると、全戸数 115 軒のうち、商工業に全く従事していない家は 27 軒

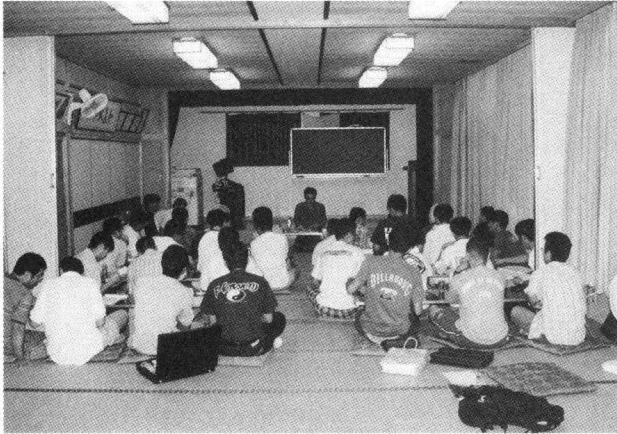


図2 現在の大当番会議

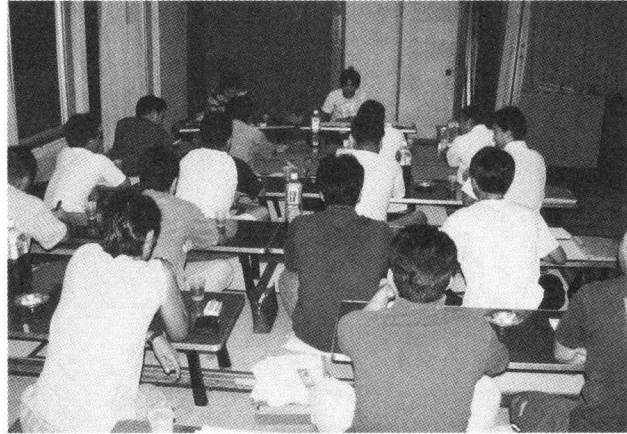


図3 現在の年番会議

(図1において、「農業」あるいは「住宅」と表記)しかなく、それに対して、おそらく家族経営と思われる商店が63軒もあり、全体のおよそ55%を占めている。全戸数内に占める商店の割合が高いというこのような傾向は、仲横町だけではなく、ほとんどの町内においても見られたとされている。但し、唯一の例外として、下宿の名が挙げられる。下宿は、住民の半数以上が、農業に従事していたといわれている。しかし、森地区全体から見れば、農家は少なかったようであり、昭和30年代においても、やはり商人の町であった。⁽²⁾

森の祭りの運営組織

森の祭りの運営に携わる組織は、町内に関するものと、祭り全体に関するものとに、大別できる。まずは、町内に関する組織を見ていくことにしよう。森の祭りに参加する各町内は、「社」と呼ばれる組織をもっており、これが中心となって、祭りの準備から運営を行なっている。社は数えて35歳までの「若衆」と、50歳までの「中老」によって構成されており、若衆の代表は「社長」、中老の代表は「頭取」と、それぞれ呼ばれている。

一方、森の祭り全体の運営に関しては、現在、「祭典本部」と呼ばれる組織が担当している。しかし、祭典本部は、1974年(昭和49)に新設された組織であり、またこのとき、各社の中老も正式に組織されたのであった。⁽³⁾それ以前の森の祭りは、「大当番会議」と「年番会議」という、2つの組織によって運営されていた(図2・3)。両会議は、各社社長と、大当番社長(1名)および年番社長(1名)によって構成されていた。つまり、1974年以前の森の祭りは、彼ら12人の若衆によって運営されていたのであり、当然、警察や露天商といった外部との折衝も彼らだけで行なっていたのである。

しかし、祭りという地域社会の一大行事を、34歳の青年に担わせたのはなぜであろうか。それは、森地区が商人町であることと、何らかの関係があるのではないか。このような疑問に答えるため、これ以降、1973年までの祭りを経験した人々の語りを交えて考察を加えることにする。

②……………商人町の祭り

社長

森の祭りにおいて、担い手や住民が重要視する役職は2つあり、それは社長と「交渉⁽⁴⁾」である。1973年までの社長は、社のみならず町内をもまとめ、外部との折衝を行ない、何かにつけて重い責任を負うという役職であった。特に、森の祭りは、別名「森のけんか祭り」と呼ばれることもあって、警察からの圧力や露天商とのいざこざが絶えなかったという。不意に発生するこれらの出来事を穏便に解決することもまた、社長の重要な仕事の1つであった。

この役職には、数えて35歳の人々の中で、先に挙げた職務を遂行できる能力を有し、なおかつ、他町内に顔がきき、押しの強い人になるべきだといわれている⁽⁵⁾。住民は、今年の社長が誰であるかを非常に気にしていたらしく、祭り前になると「今年の〇〇社の社長は誰だい?」「△△の家のコゾウ（息子の意）だい」という会話が頻繁に交わされたという。このようなやり取りは、現在でも容易に聞くことができ、しかも、これらは自町内の人々のみならず、他町内の人々によってもなされる。まさに、社長は、当年の森の祭りにおける顔役である。このことを社長の側から捉えなおせば、社長となることで、自己の知名度を上げ、森の祭りに参加する各町内にその存在を知らしめることになるといえよう。

さらに、大抵の場合、社長は前年度までに、次に述べる交渉を経験していることが多い。このことは、交渉という係に必要な資質を持ち合せていないと、社長にはなれないということを意味している。

交渉

一方、交渉とは、屋台の運行に関して絶対の権限をもっており、社長ですら、彼らの意見に異論を唱えることはできないとされている。それは、「交渉（進行）を殴ったら、ただでは済まない」といわれるが、「社長を殴ったら、ただでは済まない」とはいわれないことから、彼らの権限がいかに強いかを理解することができよう⁽⁶⁾。交渉係には、基本的に、数えて32～34歳の人となり、他社に顔がきき、押しの強い人が望ましいといわれている。

彼らは「練り」と呼ばれる行事において（図4）、特に活躍する。練りとは、基本的に夜間に行なわれ、2台の屋台を近づけて置き、屋台と屋台の間にできたスペースを使って、人々が互いに体をぶつけあう行事のことをいう。屋台が、やっと1台通れるくらいの道幅しかない、狭い森地区の通りで、屋台が鉢合わせしてしまったとき、どちらかの屋台がすれ違いのできるところまで下がらなければならなかった⁽⁷⁾。どちらの屋台が下がるのか、それを決める手段として練りが行なわれ、負けた方が道を譲った。練りの勝敗は、勢いのない方が負けとも、「手木」（図5）と呼ばれる屋台構造上の一部が先に地面についた方が負けともいわれている。しかし、実際には、練りの勝敗のみによって道を譲る屋台が決定されたわけではなく、交渉同士による話し合いやかけひきも（図6）、大きな要因となっていたという。

そこでは、例えば、次のような策がめぐらされた。ある社との練りにおいて、明らかに自社の勢いがなかったとき、通常は道を譲らなければならない。その際、まずは、相手の交渉との間に、自

社が先に下がるが、自社が10 m下がるまで相手は屋台を動かさないという約束を取り交わす。次に、約束通り、自社の屋台を先に動かすが、非常にゆっくりと屋台を下げる。すると、大抵の場合、じれったくなった相手は自社が10 m下がる前に屋台を動かしてしまう。この時点で屋台を止め、再び練りを行なわせ、その間に相手の交渉を約束違反であると責める。こうすることで、練りにおいて劣勢であっても、相手の屋台を下げさせる道が開かれるのである。まさに、練りとは、係としての「交渉」の交渉能力が要求される場⁽⁸⁾なのだ。

若衆が祭りを仕切る理由

以上、見てきたように、社長と交渉には、重い責任、統率力、外部との折衝、広範な人間関係、かけひき能力などが要求されていた。このような能力を、よくよく眺めてみると、商売活動をする上で必要とされる能力との共通性を指摘できるように思われる。しかも、社長や交渉には、自町内に住む長男、つまり商家の跡取りしかなれなかった⁽⁹⁾という。これらの点を考慮すると、森の祭りとは、次世代の家業を担う若衆に商業において必要な能力を獲得・発揮させる場であったと解釈することができる。とすれば、必要とされる能力に関して、祭りと日常生活との間に関連性を見出すことが可能となり、中村が述べた見解を支持することができよう。



図4 現在の練りの様子

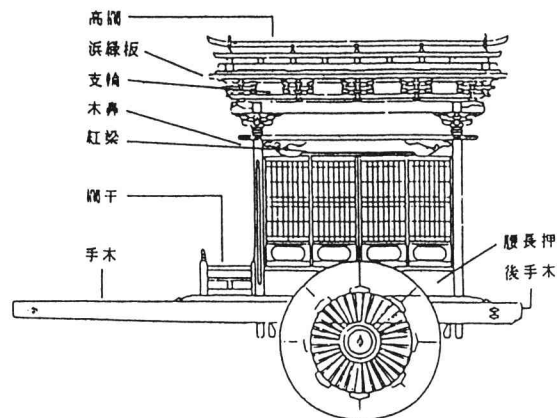


図5 森の祭り屋台の構造 (大庭 1997: 32 より)



図6 現在の進行係(旧称は交渉)による話し合い

③……………旧社長の解釈

しかしながら、上で示したような解釈は、あくまで筆者の分析によって導き出されたものであり、祭りの担い手たちがどのように感じているのかは、また別の問題である。そこで次に、社長と交渉の経験者たちが、どのように自己の体験を認識しているかについて考えていきたい。この点に関して、ここでは、先に家族経営の商店が軒を並べていたことが確認された仲横町に住む2人の語りを事例として取り上げる。

まず始めに、昭和30年代には、家業の燃料屋を手伝っており、その後はガソリンスタンドを経営するに至った杉田佐吉さん⁽¹⁰⁾（大正15年生まれ）の語りを見てみよう。杉田さんによると、社長や交渉をやったときに必要とされた能力が、家業には生かされたことはそれほどなかったという。しかし、さらに続けて、これらの能力は、気がつかなかっただけで、商売をやる上でプラスになっていたのかもしれないとも述べている。また、同じころに家業の食料品店を手伝っており、親の引退後、その店を引き継いだ樋口憲太郎さん（昭和5年生まれ）は、次のように語っている。交渉さらには社長を経験して、自分に統率力が具わった気がするという。このような経験を、彼は、いい社会勉強になったと評価している。また何か事を起こすときには、大老⁽¹¹⁾にも気をつかうべきであることを、このときに学んだらしい。但し、こういった能力や経験が、家業に生かされたということとはあまりなかったと振り返っている。

ここで注目すべきは、2人とも、社長や交渉を経験することで獲得・発揮された能力が家業に生かされたことはなかったと認識していることである。このことは、つまり、中村が示した見解とは異なる意味づけを、当事者が行なっていることを表している。なぜ、このような相違が生じてしまったのであろうか。その理由の1つとして、地域的な違いを挙げることができよう。角館や博多では見出せたものが、森地区では何らかの要因のため、見るができなかったという理由だ。とするならば、その要因とは、一体何であらうか。

④……………祭りと日常生活との関連性

この問いに答える前に、ここで、先の語りの特徴をもう少し見ていこう。というのも、そうすることが、この問いに対する答えを用意するに思われるからだ。2人の語りにみられる、個人的な認識に注目すると、中村の示した見解と異なっていることを容易に確認できる。しかし、奇妙なことに、だからといって、彼女の見解を完全に否定することはできない。なぜならば、杉田さんは、社長・交渉で必要とされた能力が家業をやる上でプラスとなる可能性を明確に示唆しているからだ。また、樋口さんは、祭りと家業との関連性を否定する際に、「全くない」あるいは「全然ない」といった強い否定をあらわす言葉ではなく、「あまりない」という柔らかい言葉を使っていた。この点から、樋口さんでさえ、万に一つの可能性を残しているということができよう。要するに、両者ともに、必要とされる能力において祭りと家業との関係を完全否定しているわけではなく、その潜在的可能性を示唆しているのである。

これらの関連性を、自己の認識として積極的に肯定していないものの、その潜在的可能性を示唆する。何故、彼らは、このようなあいまいな態度を取るのでしょうか。この理由こそ、角館や博多との違いを生む要因と関係があるように思われる。彼らがあいまいな態度を取る理由、それは、祭りと日常生活との関連性について担い手たちがどう認識しているかに関わっている。例えば、彼らが重視する人間関係は、祭りの場合と日常的な商業活動の場合とで異なっている。一般的に、森の祭りに参加する人々は、仲間とバカ騒ぎしながら時間を過ごすことに、祭りの意味を見出している。この場合、「仲間」の範疇には、祭りに参加する町内に住んでいる人々だけでなく、仕事や家の都合でこの地から離れたが、祭りのときに帰省してきた人も含まれる。つまり、過去においてであれ、現在であれ、地縁的な関係にある人々との関係が重要視されているのだ。これに対して、日常的な商業活動において結ばれる人間関係とは、明らかに地縁に限定されるものではない。そこでは、地域の枠を超え、さまざまな人々と業者（店）—顧客関係が結ばれていく。この関係が、明確な集団を形成することはほとんどなく、むしろ、業者を中心として放射状に広がるネットワークとなるであろう。いずれにせよ、日常において重視されるのは、このネットワークなのである。⁽¹²⁾

祭りで重視される地縁と日常生活におけるネットワーク、上野千鶴子の言葉を借りれば、「選べない関係」と「選べる関係」との対比を見ることができる[上野 1984]。⁽¹³⁾この、人間関係における相違は、森の祭りに参加する人々の意識をよく表しているように思われる。彼らにとって、祭りとは、あくまで祭りという特別な時間なのであって、日常生活と関連づけられるものではないらしい。このことは、これらを関連づけようとする筆者の視点に対して、非常に多くの人々が難色を示したことからも理解できる。彼らによれば、筆者のような見方をすると、確かに祭りと商売が結びつくかもしれないという。しかし、それでは、祭りがあまりにも味気なくなってしまう。祭りとは、仲間との、もっと人間味溢れる付き合いを大切にすべき時間なのだと述べ、祭りと日常的な商業活動とは別物であることを強調していた。この種の語りは、面白いことに、現代の若衆も口にする。

さらに、また、このような認識のあり方をより明確にする意味で、もう一度、杉田さんの語りを想起して欲しい。彼は、社長・交渉をやる上で必要とされた能力が家業においてプラスとなる可能性を示唆する際に、「気がつかなかっただけで」という言葉をつけ加えていた。この言葉は、なぜ発せられたのであろうか。先の文脈に位置づけて解釈を行えば、その答えは明らかとなろう。すなわち、杉田さんにとっても、祭りと日常生活とを結びつけるという発想がなかったため、これまで「気がつかなかった」ものと思われる。逆にいえば、杉田さんは、筆者の質問を前にして、初めて、両者の関係に気づいたのだ。

モーリス・ブロックは、「世界にかんするふたつのイメージ——儀礼的なものと日常的なもの——は通常、つまり非革命的な環境においては互いに競合することはありえない」と述べている[ブロック 1994:362]。ブロックによる、この指摘は、森の祭りにおいても当てはまることは、今や明白であろう。そして、このような認識のあり方こそ、角館や博多と森地区との間に差異をもたらした原因なのである。

むすびにかえて

以上、本稿では、森の祭りを例に、中村の研究に見られた視点を検証してきた。その結果、一見、必要とされる能力は祭りと日常生活との間で関連しているように見えるが、担い手たちの認識からすると両場面は全く別物であるため、祭りと日常生活において必要とされる能力を関係づけるという発想を欠いていたことが明らかとなった。

ところで、松平誠は、祭りに参加する人々の結合原理を基準に、現代日本における祭りの分類を試みている。その中の1つに、「伝統型祝祭」という類型があり、その基本的な特徴は、「核となる伝統保持の共同組織をもって運用される生活共同の祝祭だ」という点にある¹⁾としている[松平1990:16]。松平の言にしたがえば、飾山囃子や博多祇園山笠も、さらには森の祭りも、「伝統型祝祭」に分類されることは間違いない。しかしながら、本稿で見たように、担い手たちが祭りと日常生活との関係をどのように認識しているのかという指標を持ちこんだ場合、同じ「伝統型祝祭」の中にも差異があることが理解できよう。結合原理は同じでありながら、認識において異なる祭りが存在する。我々は、この違いを、どのように捉えるべきなのであろうか。

ここで、その捉え方の1つを示すとすれば、これら2つのタイプの祭りを同一直線上に並べるという考え方があろう。すなわち、これは、森の祭りの担い手たちも、いずれは角館や博多のように、祭りと日常生活とを関連づけて認識するようになるということを前提に、研究を進めていくという方向性である。理論的には、当然、このような認識における変化が起こることを想定できる。その場合、この種の変化は、いつ、どんな理由で、どのようなメカニズムで起こるのか、これらを詳細に分析することが必要となろう。また、これとは逆に、このような変化が起こらないという可能性も考えられうる。その場合には、何故、変化が起こらないのかという研究が必要となってくると共に、このような差異がなぜ生じているのかについての説明が必要となる。いずれにせよ、担い手たちの認識に着目し、祭りを記述していくことが今後の課題の1つとなろう。

附記

本稿執筆に先立つ調査にあたって、御協力頂いた森の祭りに関係する多くの方々に御礼申し上げます。また、宮家準教授、鈴木正崇教授、和崎春日教授を始め、中山和久、宮下克也、織田竜也、飯田瑞穂子の諸氏には、有益な御助言・御指導を賜り、ここに改めて深甚の謝意を記します。

註

(1)——戸綿の氏神は、正確にいうと、賀茂神社である。しかし、当社は、10月の第2土・日に例大祭を行なうため、便宜的に森の祭りでは稲荷神社を信仰の核としている。

(2)——ちなみに1995年(平成7)の産業別就業人口を見てみると、9割以上が、第2次・第3次産業に従事しており[森町商工観光課広報統計係 1998]、その多く

がサラリーマンだという。その意味では、現在の森地区を、商人の町として定位することはできない。

(3)——このような、組織改革が計られた理由は、前年、すなわち1973年に2件の死亡事故が発生したことによる。この事件を重く見た森の祭り関係者は、再発を防止するために改革を行なったのである[森の祭り祭典本部・特設祭典写真班 1989]。

(4)——現在、交渉は「進行係」と呼ばれている。

(5)——仲横町の比雲社の場合、社長には、このような個人的資質だけでなく、一定の「家格」が要求されたという。すなわち、老舗がある程度の資産家の子息であることが望ましいとされていた。

(6)——だからといって、社長は殴られてもしかたのない存在として認識されているわけでもなく、またそのような事例を耳にしたこともない。

(7)——森の祭りにおいて、「屋台を下げる」ということには、一般的に負のイメージがある。

(8)——但し、現在では、交差点で練りが行なわれるため、このような交渉は行なわれない。しかし、だからといって、練りにおける進行係の交渉能力が必要とされなくなったわけではない。いまでも、練りでは、彼らの力量が問われるという。例えば、それは、1つの練りを終わりにする瞬間に見られる。練りとは、森の祭りにおけるクライマックスの1つであり、担い手たちが最も楽しみにしている行事であるため、彼らはできるだけ多く練りを行なうことを望んでいる。したがって、ある交差点での練りが終わると、次に練りが行なわれる交差点へと急行することになる。しかし、森地区の通りは狭いため、順序よく交差点を離れない限り、屋台は進むことができない。このとき、交差点を離れるのが遅くなると、次の練りに間に合わなくなり、傍観者となってしまう可能性が生じる。このような事態を避けるために、進行係は、いかに早く自社の屋台を出発させるかを巡って、他社の

進行係との間で、かけひきを展開するのだという。

(9)——昭和30年代、すでに空き地の少なかった森地区では、次男以降は結婚して家を建てるとなると、ほとんどの場合、他所へ転出しなければならなかった。彼らは祭りになると帰ってきたが、社の重要な役職を与えられることはなかったらしい。したがって、交渉や社長という要職に、彼らが就くことはなかった。

(10)——本稿で用いる個人名は、プライバシーを考慮して、全て仮名としてある。

(11)——「大老」とは、数えて51歳以上の人々のことを指す。彼らは、社の構成員ではないが、ことあるごとに若い世代からの相談を受け、アドバイスを行なっている。

(12)——この点に関して、織田竜也、飯田瑞穂子両氏より、有意義な示唆を受けた。

(13)——但し、上野は「祭りを、集団帰属の選択によるアイデンティティの獲得という観点から再び定義し直せば、祭りとは、『選べない関係』を『選べる関係』へと直す契機であると言える」と述べている[上野 1984: 55]。上野の議論によれば、祭りとは、集団の内部に外部を作り出す装置[同: 53]であるため、祭りに参加する個人からすると、自分が何者であるかを決定する際、内部の外部との対比によって、自己をある集団へとアイデンティファイすることになる。上野のこの指摘は、非常に示唆的ではあるが、本稿では祭りと日常生活とを参加者たちがどのように認識しているのかに重点があるため、これ以上、上野の議論に深く関わる必要はないと考える。

参考文献 (以下に掲げていない文献に関しては本文に明記した)

- 上野千鶴子 1984 「祭りと共同体」『地域文化の社会学』 世界思想社 pp.45-78
 大庭 学 1997 『遠州森の祭りの歴史』
 中村孚美 1993 (1971) 「町と祭り——秋田県角館町の飾山囃子の場合」『日本歴史民俗論集5 都市の生活文化』 吉川弘文館 pp.205-236
 1972a 「秩父祭り——都市の祭りの社会人類学」『季刊人類学』3巻4号 pp.149-192
 1972b 「都市と祭り——川越祭りをめぐって」『現代諸民族の宗教と文化』 社会思想社 pp.353-384
 1986 「博多祇園山笠——そのダイナミックスとアーバンイズム」『社会人類学の諸問題』第一書房 pp.161-185
 ブロック, M 1994 『祝福から暴力へ』 田辺繁治・秋津元輝訳 法政大学出版局
 松平 誠 1990 『都市祝祭の社会学』 有斐閣
 森の祭り祭典本部・特設祭典写真班 1989 『遠州森の祭り』
 森町史編さん委員会 1993 『森町史』資料編3 近世
 1996 『森町史』通史編上巻
 森町商工観光課広報統計係 1998 『森町の統計 平成9年度版』
 米山俊直 1974 『祇園祭——都市人類学ことはじめ』 中公新書

(慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程)
 (2001年2月28日 審査終了受理)

The Connection between Festival and Everyday: Rethinking of NAKAMURA Fumi's Studies through Mori Festival

YABE Shingo

NAKAMURA Fumi is a researcher who pioneered the field of "festival studies" or "urban festival studies". She energetically monographed in this field, and one of the characteristics of these monographs is her opinion that the abilities required in both scenes of a festival and everyday life are relevant. Thereafter this incentive viewpoint does not seem to have been regarded positively.

This paper tries to analyze Mori festival in Mori-machi, Shuchi-gun, Shizuoka Prefecture, from the same viewpoint as NAKAMURA's.

As first sight, the abilities required in a festival and every day seemed relevant, but it has become clear that for the persons concerned in the festival, these abilities are not related. It is because they recognize that a festival and everyday life are completely different things, and they really lack conception of relating these two.

The existence of this recognition in itself implies difference from the areas where NAKAMURA researched. Being classified from the uniting theory of the festival participants, the festivals in the areas where NAKAMURA researched and Mori festival of this paper seem to belong to the same category of "traditional festivals". However, if we add an index how people in a festival recognize the festival and every day, it can be seen that there exists difference even in one category. Then, the next issue is how we should grasp such difference. For this issue, the author's suggestion for the future is supplementally added at the end of this paper.

key words: festival studies, NAKAMURA Fumi, festival and everyday life, Mori festival, cognition
